

# 海軍佐伯防備隊由良岬衛所跡

愛南町

由良半島は豊後水道に張り出している半島で、北半分は宇和島市（旧津島町）に属し、南半分は愛南町（旧内海村）に属している。その愛南町分の最西端に、昭和20（1945）年の敗戦まで、旧日本海軍の潜水艦探知施設（衛所）が置かれていた。施設の正式名称を由良崎防備衛所といい、所属部隊名を海軍佐伯防備隊といった。現在も聴音室跡や見張所跡など各種の遺構が残っている。

海軍は豊後水道海面の防衛と作戦を担当していたため、各地に衛所、砲台、見張所の設置を計画、これら施設を統括する部隊として、大分県佐伯に司令部を置く佐伯防備隊を開隊させた。昭和14（1939）年10月のことである。

由良半島における衛所、砲台等の建設地はいずれも岬先端の崖の上や山頂など、艦船の捕捉という任務に適するとともに、軍の機密を保持するため集落から離れた不便な場所であり、建設は困難を極めた。工事は技術者の指揮の下、朝鮮人を含む大勢の徴用工と地元民を動員して遂行された。

衛所は敗戦まで直接攻撃を受けたことはなかったが、豊後水道が中四国を空襲に向かうアメリカ軍機の通り道となっていたため、敗戦までアメリカ軍機が上空を飛行した。

昭和20（1945）年に入ると本土決戦に備えて、施設の増設、兵員の増員が行われたが、8月15日、日本の敗戦で戦争は終結した。その後砲台や衛所は爆破され、弾薬や各種の機材は海に投棄された。

愛南町には、その他にも昭和53（1978）年に久良湾で発見され、その後引き上げられた戦闘機紫電改が、その他の戦争資料とともに恒久平和のシンボルとして展示されている。

戦後70年を迎えようとしている今日、過去の歴史について語る者は少なくなった。しかし、二度と戦争という過ちを繰り返さないためにも、人の命の尊厳を守るためにも恒久平和について考えていく必要がある。

物言わぬ数々の遺構たちは、そう私たちに語りかけている。



見張所跡



聴音室跡

〔参考資料〕

内海村史編纂委員会 『内海村史』